みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

〈日本語解説〉「『台湾客家と日本』巡回展をめぐる構想」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009552

〈日本語解説〉「『台湾客家と日本』巡回展をめぐる構想」

前論考の日本語解説において、台湾客家文化研究センターの概略をすでに説明した。同センターは2011年～2014年に交通大学に委託して日本の客家をめぐる調査プロジェクト施行しており、その成果は書籍『東瀛客蹤 ── 日本客家研究初探』(張維安編、2015年)として結実している。その調査チームの責任者であったのが本書の編者の１人である張維安であり、もう１人の編者である河合洋尚も調査協力者として参与した。それまで日本の客家研究は日本国内の客家について系統的に扱うことはなく、書籍・論文・エッセイで部分的に言及されるにすぎなかった。しかし、この調査プロジェクトを契機として、近年では日本の客家をめぐる研究が徐々に増加している。

本書は「南側地域」の客家を主要な対象としているため、その定義から外れ、しかもカナダのように「南側地域」からの再移住も少ない日本についてはあまりとりあげていない。ただし張維安の講演録にもあるように、客家語が失われ混血が進む状況のなかで客家が意識が保たれているという「ポスト客家語」的状況は、「南側地域」だけでなく日本にも該当するため、よい比較の対象となる。今回の国際シンポジウムは日本で開催したこともあり、また日本の客家をめぐる展示も構想されはじめているため、当日は本稿の基盤となる発表もお願いした。本稿の概要は次の通りである。

- 台湾における客家の概況を簡潔に述べてから、日本との関係について述べている。周知の通り、台湾は1895年から1945年まで日本の統治下にあったため、当時の台湾客家地域は日本の文化的、経済的影響を大きく受けてきた。他方で、日本の客家の大半は台湾から移住しており、彼らは客家団体を結成している。
- 日本統治期における台湾の客家地域では、さまざまな方面で日本の影響を受けてきた。その１つが野球である。台湾の野球は日本によってもたらされており、多くの客家も野球を楽しむようになり、野球選手も登場した。その代表人物の一人が、映画『KANO』の主人公である呉明捷である。他方で、経済的な影響も受け、日本人が開発した樟脳は客家の主要な産業の一つともなった。花蓮の客家地域には日本移民村も設置され、客家と日本人が共住する舞台ともなった。また、日本の影響を受けて、客家文学、音楽なども発展した。何阿文をはじめとする台湾の客家山歌歌手は日本でも活動しており、その音楽レコードの一部は国立民族学博物館でも保管されている。
- 日本の研究者も台湾の客家についてするようになった。日本政府の調査者、伊能嘉矩をはじめ、戦後も植松明石、渡邊欣雄などの学者が台湾の客家地域で調査した。
- 日本統治期より台湾の客家は日本へと徐々に移住するようになった。1945年には日本に残った一部の台湾客家が「客家公会」を設立し、その後、日本各地に客家団体である崇正会が設立されるようになった。現在、東京、関東、名古屋、関西、沖縄の５つの崇正会があるほか、学術団体として「日本国際客家文化協会」が設立されている。

日本の客家は各種の業種についている。例えば、味千ラーメンの創始者・劉壇祥（重光孝治）、芸能人である范文雀、余貴美子、謝珠栄、女流棋士である謝依旻らは、台湾出身の客家である。

- 以上の研究蓄積に基づき、台湾客家文化発展センターはまず自身の博物館で「日本と台湾客家」をめぐる展示をおこない、その後、巡回展をおこなうことを構想している。

本稿は、あくまで比較の材料として提示しているが、「南側地域」をめぐる研究や展示の参考になればと考えている。なお、日本の客家をめぐる日本語の情報については、『客家――歴史・文化・イメージ』（飯島典子・河合洋尚・小林宏至、2019年、現代書館）の第10章およびコラム①でもとりあげているので、関心のある方はそちらもご参考いただきたい。

（河合洋尚）